

カリブ海世界の旅から

国本 伊代

カリブ海地域の島国を歩いてくることは、私の長年の夢であった。大アンティル諸島のキューバ、ジャマイカ、ドミニカ共和国へは出かけたことはあっても、カリブ海域の東端に弧を描いて点在する小アンティル諸島へ出かける機会はこれまでなかったからである。長年にわたり大学でラテンアメリカ史を担当し、ラテンアメリカの歴史に関する本まで書いてきた自分がカリブ海世界を実体験していなかったことに、後ろめたさをずっと感じていた。そこで、その成り立ちと現在の姿を学び直してみようと決心して実行したのがカリブ海世界の旅となった。しかし出かけるだけではもったいない話である。そこで『カリブ海世界を知るための70章』と題する本を企画し、単なる旅行ガイドではなくもう少し踏み込んでこの地域の歴史と現在の姿を紹介する本をまとめてみようと考えた。大胆な企画であったが、政治、経済、社会だけでなく、比較文学から比較言語学の分野に至るカリブ海域の専門家を探し出し、日本とカリブ海世界の関係も加えて、執筆者を確保した。2017年中には明石書店のエリア・スタディーズのシリーズの仲間入りをする予定である。そこで私は15年の7月から16年の3月にかけて3回カリブ海域へ出かけた。

キューバとジャマイカ再訪

カリブ海世界を学び直す旅はキューバから始めた。まずキューバが米

国と国交を回復させようとしていた直前の2015年7月にキューバに出かけた。1987年に出かけたきりのキューバは、あまり変わっていないというのが正直な印象である。確かに革命広場には超近代的な建物ホセ・マルティ記念博物館が新たに聳え立ち、外国人観光客向けに派手な色に塗られたハバナ名物クラシックカー・タクシーが走り、かつてはなかった自転車タクシーが外国人観光客を狙ってホテル周辺に集まっていた。しかし新たに出現した外国人観光客向けの施設を除くと、キューバ社会の貧しさは4半世紀前の姿とあまり変わっていなかった。サンティアゴ・デ・クーバを案内してくれたガイドは教師を辞めてガイドに転職し、やっと食べていけるようになったという。夜ホテルのテラスで食事をしていて、一人の老婆が私のテーブルに居座ってビールをせびり、生活苦を長々と話していった。このような行動がとれるだけキューバに

は昔と違って個人の自由が存在することも知ったが、普通の人びとの暮らしがとても貧しいこともわかった。

一方、今回の3回目の旅で最後の訪問国となったジャマイカはトリニダード・トバゴとともにカリブ海域の大国であることに変わりはない。治安の悪化を除けば、恵まれた観光資源に頼る経済の発展に、20年前に出かけたときの記憶とは非常に異なるジャマイカの姿を視た。国立美術館や博物館が整備されている。またカリブ海諸国の高等教育の中心としても知られる西インド諸島大学モナ校の教育環境は良好である。トリニダード・トバゴにある同大学セント・アウグスティン・キャンパスが熱帯農業と工学の分野に優れ、バルバドスの同大学ケープヒル・キャンパスがカリブ海諸国の法曹界を支配するほど突出した法学部の存在で知られているのに対して、モナ校は人文社会科学系に秀でているとされて



ジャマイカの首都キングストンの西インド諸島大学モナ校のキャンパス風景（以下、写真は全て筆者撮影）

きた。しかしこの伝統は大きく変わ
りかけているようだ。

モナ校では日本政府が寄贈した
LL 教室の施設を利用した日本語ク
ラスを視察した。必須科目でない日
本語を学ぶ学生の日本への関心と外
国語教育センターを運営する教員・
スタッフの熱意は高い。ここではス
페인語とフランス語の他に最近開
設されたポルトガル語のほかは中国
語と日本語だけで、5つの外国語講
座しか開いていない。ドイツ人は英
語を話すのでドイツ語を廃止し、将
来を見据えて中国語と日本語教育に
力を入れることにしたという。日本
では想像できない柔軟で大胆な発
想である。キューバの経済発展に結
びつく改革には相当の時間を要する
であろう。またジャマイカの治安の
改善も決して容易ではないであろう
が、ジャマイカの前向きな姿勢に明
るい将来をみたような気がした。

「白い砂浜と碧い海」の観光の 現場

カリブ海世界への2回目の旅で
は、10月にカリブ海諸国の主要産業
である観光を知るために「南カリブ
海クルーズ10日間」というものに
参加した。それまで私はクルーズ船
の旅は時間のある金持ち老人が乗る

ものだと考えていて、自分が乗るこ
とになるなどとは思ってもいなかっ
た。私は金持ちではないが確かに定
年退職して時間のある老人だから、
クルーズ船に乗ってみてもよいであ
ろう。選んだロイヤル・プリンセス
号は、乗船客3,535名で平均年齢63
歳、最高年齢91歳、乗組員1,345名。
豪華客船は船内生活完結型であっ
た。毎朝部屋に届く船内新聞は英語
版で船内放送も英語だけであった
から、乗客のほとんどはアメリカ人
であろうと推測できた。交渉して手
に入れた資料によると、乗客の92%
がアメリカ人(2,645名)、カナダ人
(398名)、イギリス人(215名)で、
日本人は6名だけであった。カジノ
から美容室・読書室・ゲーム室・劇
場・プール・数々のレストランやバ
ーがあり、フォーマルな服装で出席
するディナーが2回あった。しかし
それが嫌ならカジュアルな格好で食
べられるビュッフェ・スタイルのレ
ストラン街も船内にある。絵画のオ
ークションが数回開かれたことには
びっくりした。

寄港地では多くの半日ツアーが組
まれていて、下船すると埠頭に待っ
ている車で目的地に直行した。カカ
オ・プランテーションやスパイス・
ガーデン訪問などのツアーが用意さ

れていたからである。寄港した少数
の島での大雑把な推測だが、豪華客
船の寄港は地元でそれほど経済効
果をもたらさないのではないかと。埠
頭の出入り口近くに新設された商店
街の半分以上の店がシャッターを下
していたからである。小さい島国で
は首都とはいえ街中では見るものは
ほとんどないから、半日程度で出か
けられる内陸部へのツアーかビーチ
行きとなる。しかし乗船客の大半の
老人はダイビングやシュノーケルで
碧いカリブの海に潜って楽しむこと
は少ない。また上陸しても買いたい
ほどの土産品もあまりなく、老人た
ちは小物にちょっぴりのお金をかけ
るだけである。

しかし3回目の旅で各島を数日か
けて歩いて理解したことは、確かに
「白い砂浜と碧い海」が非常に魅
力的で、有力な観光資源であること
であった。さらに内陸部に熱帯雨林
地帯をもつ島では1時間も車で走る
と、白浜と紺碧の海とは全く異なる
熱帯のジャングルに潜り込める。中
米のコスタリカにおけるような徹底
したエコツーリズム普及型の観光開
発政策によって、カリブ海域の多く
の島国はもっと豊かな観光立国にな
れるのではないかと。そのためには外
国資本による一方的な観光開発では



トリニダード島南部のヒンズー教寺院



スリナムの首都パラマリボのユダヤ教のシナゴグと隣接したイスラム教のモスク

なく、住民が自国の自然の素晴らしさを自覚し、自分達のコミュニティを中心とした「手作り」の開発に組み、自らの暮らしを豊かにしようとする努力が求められよう。

多民族・多文化社会の現状を知る

カリブ海域は1492年のコロンブス率いるヨーロッパ人との接触以来、「人種の総入れ替え」とも呼べるほどの住民の大移動を経験した。約300万人とも推計されるコロンブス到来以前の先住民の多くが征服の戦いの過程で死亡し、絶望の中で自殺し、そしてヨーロッパ人が持ち込んだ未体験の疫病で大量死したことは知られている。16世紀に始まり18世紀に全盛期を迎えた砂糖の生産をはじめとして、カカオ、タバコ、スパイスなどのプランテーションがヨーロッパ人の手で拓かれ、占領した島々の開発には激減した先住民に代わる労働力としてアフリカ大陸から大量の黒人奴隷が導入された。さらに、豊かな富を生む島々をめぐるイギリス、フランス、オランダ、スペインなどヨーロッパ列強が熾烈な戦いを繰り広げ、この間の17～18世紀には15世紀末にイベリア半島から追放されヨーロッパ各地に逃亡したユダヤ人によるプランテーシ

ョン開発がオランダやイギリスによって認められた。19世紀前半の奴隷解放後には不足する労働力を補うために植民地支配下にあったインドとジャワ島、さらに中国から労働移民が「契約労働者」として送り込まれた。その結果が、21世紀のカリブ海諸国の多人種・多民族・多文化社会の姿である。

カリブ海域のほとんどの国は、以上のような開発の過程でアフリカから導入された黒人奴隷を先祖にもつアフリカ系住民が現在は圧倒的多数を占めている。しかしアフリカ大陸のさまざまな地方を先祖の地とする多様な民族、19世紀に始まるインド、インドネシア、中国、アラブ地域からの移民の到来はカリブ海世界をアフリカ系住民だけでなく多人種・多民族・多文化が共存する世界に変えた。ヨーロッパ諸国の植民地支配から独立した多くのカリブ海諸国はその独立の歴史をまだ半世紀ほどしか経験していない。この間に民族間の多くの葛藤と対立があったとはいえ、私が見て歩いたこれらの国々はすでにそのような対立の時代を乗り越えて多人種・多民族・多文化が共存する時代に入っているように思われた。絶滅に追い込まれたとされる先住民の保護区が1903年に

設置されていたことや統計的には消滅寸前にある21世紀のユダヤ系社会が信仰を失いつつも歴然と存在する事実を、私は今度の旅で知った。また同行者が文化人類学者であったことも幸いだった。途中で出会ったさまざまな場面での彼女の解説から、私は多くのことを学んだ。

カリブ海諸国の経済統合、さらには政治統合をも目指す動きも進んでいる。脆弱なカリブ海域の防災体制を域内の協力体制で最小限に防ごうとする現場も訪れた。観光業に次ぐ主要産業の水産業でも、資源保護から漁獲・水揚げ・市場を通じての国内流通や輸出など全プロセスに日本の技術や漁業協同組合の導入支援を受けて変化が始まっていた。カリブ海世界は日本から遠いのではなく、私たちがあまり知らないだけなのだ。もう一度、もっと時間をかけて歩きたいと思う。

(くにもといよ 中央大学名誉教授)

(教育に力を入れる島国ドミニカの首都ロゾーの早朝)



①バスを待つ制服姿の中学生達



②母親に付き添われて学校に向かう小学生達